

「からし種」と「パン種」のたとえという小標題が掲げられます。この2つのたとえ話はルカ(13;18-21)でもワンセットにして描いていますが、マルコ(4;30-32)では「からし種」しか登場しません。さらにトマス福音書では別々になっているところから考えると、本来この伝承は別個のものであったのが早い段階で結びついたものと思われる。

マタイがこれらを毒麦のたとえの直後に置いたのは、毒麦のたとえが終末までの忍耐と、終末には決着がつけられるという全幅の信頼を基に描かれているため、このからし種のたとえも同様の内容を判断したためかと思われます。いずれにいたしましても、マタイはからし種のたとえをマルコから、そしてパン種のたとえをQ資料から引っ張ってきて、それらの要素を混合させて編集したというのが事実に近いと考えられます。その特徴として最初は「どんな種よりも小さい」(32)ののですが、最後は「成長するとどの野菜より大きく」(32)なるという対比の点でマルコを踏襲し、「空の鳥が来て枝に巣を作るほどの木」(32)になるという点とパン種のたとえの付加という点ではQ資料を用いています。

そもそもからし種というものは、わたしたちが使っている香辛料としてのからしではなく、搾って食用油を採取するものでした。その種は1ミリにも満たないもので、当時の人々が知る世界で最も小さいものの1つとして扱われておりました。ところが成長すると高さ5メートル程にもなり、それこそ小鳥が巣を作るくらいにも大きくなりました。

このたとえの意図は、からしが徐々に成長してゆくように神の国が発展してゆくという教訓話にあるわけではありません。そうではなく、種、つまり福音と

いう発端がどれほど小さいものであったとしても、結末は何よりも大きくなるという最初と最後の対比にあるのです。それは福音とは大きな結末がすでに約束されているということなのです。わたしたちは最初があつて次に最後が来ると時系列的に物事を認識しています。当たり前です。しかし、マタイの提案はそうではないのです。まず初めにイエスの十字架と復活という救いが宣言されているのが福音であるとマタイは確認するのです。ですから、人は現在の小ささに失望する必要はもうすでに無くなったのだと言うのです。むしろ、最後から最初を見るという視点の180度の転換が要求されてゆくのです。その時、人は最初から最後まで神の包容の中に抱かれていることを知るのである。パン種のとえも同様です。パン種は旧約の昔から不浄なものとして扱われてきました。しかし、大きくておいしいパンが出来ることを知っているから不浄であったとしてもイースト菌を粉に入れるのです。

神は全能といひます。信じる者の願ひは叶えられるともいひます。そうじゃないと信仰が足りないなどといわれたりします。詐欺のような話です。もし全能なら信仰を足りるようにしてくれるのが筋というものでしょう。それに、常に罪にあるわたしたち自身を省みれば、神より罪の力の方がずっと強いと考えるてしまいます。不信や罪に対し、神は非力です。しかし、そのように不信と罪の中に背く者を、最初から最後までそのまま赦す無限の抱擁が神なのです。神はその抱擁においてのみ全能なのです。